ワルシャワ・ゲットーを逃れて

Uri Orlev

“Kuru, knabo, kuru”

Ars Libri, 2019, 136p

この小説の主人公は８歳になるユダヤ人の少年スルリック。彼は、第二次世界大戦さなかの 1942 年の夏、収容されていたワルシャワ・ゲットーを脱出し、家族とも死に別れて、たった一人で生きていくことを余儀なくされる。以来、ワルシャワ近郊の森で果実や小鳥を取って暮らしたり、村から村へと流れ歩いてポーランド人の農家で下働きをしたりして戦中の４年間を過ごす。かくまってくれる者もあれば、金のためにゲシュタポに売り渡す者もある。それでも、奇跡的に殺されるのを免れて、終戦まで生き延びるのである。この作品は、にわかに信じがたいエピソードに満ちているが、作者がヨラム・フリードマン（1934～2018）から聞いた実話に基づいている。

比較すべきことではないかもしれないが、例えばエリ・ヴィーゼル（1928～2016）はアウシュヴィッツ強制収容所での体験を『夜』で描いていて、赤ん坊が生きたまま焼き殺されたり、子どもが絞首刑にされたりする。それを見つめていた囚人のひとりが「いったい〈神〉はどこにおられるのだ」と問う。語り手は「どこだって？　ここにおられる―ここに、この絞首台に吊るされておられる」と内心で答える。

それにくらべれば、本書は子ども向けに書かれていることもあろうが、あからさまに残酷なシーンはない。主人公は過酷な環境のなかで、常に希望を失わず、生き延びるためにさまざまの工夫を凝らす。農場で働いていて右腕を機械にはさまれ、病院に担ぎ込まれるが、彼がユダヤ人であることを理由に医師が手術を拒んだため、右腕を失ってしまう。それでも一生懸命工夫して、片腕で農作業をすることができるようになる。ホロコースト文学ながら、冒険譚的な明るささえ感じられる。

この作品は、信仰やアイデンティティについて考えさせるエピソードに満ちている。スルリックの父親は最後の別れに際して彼に言い聞かせる。「ユダヤ人であることを隠し、カトリックのポーランド人として生き延び得るため、ユレク・スタニャクという偽名を使え。両親の名前は忘れてもいいが、ユダヤ人であることだけは忘れるな」と。その言いつけに従って、彼は十字架を首にかけ、堅信礼まで受けることになる。とはいえ、幼いながらに信仰をめぐる葛藤もある。告解を受けながら、ユダヤ人であることは罪なのだろうかと考えたりもす

る。そうこうするうちに、ついには自分の名前すら忘れてしまう。

戦争が終わり、ユダヤ人の孤児収容施設でミセス・ラパポルトという女性と話すうちに、生きるために築いていた固い否認の壁が決壊し、ついにすべてを思い出す。そのシーンは感動的である。しかし、それによって彼がユダヤ人であることに回帰するのかというと、必ずしもそうとは言えなくて、その後も本名を名乗らず、偽名を使い続ける。また、彼を家族として扱ってくれたポーランド人が別れに際して「おれたちの神さまと同じ神さまだものな」と言うところは象徴的である。

最後の短いエピローグに記されているところによれば、彼はその後、大学を卒業するが、戦後も反ユダヤ主義のいじめにあい、イスラエルに渡ったとのことである。彼がヨラムと名前を変えたのはイスラエルに渡ってからだ。彼が信仰を持ち続けたかどうかについては記されていない。

作者の児童文学者ウーリー・オルレブ（1931～）もワルシャワ・ゲットーからベルゲン・ベルゼン強制収容所に収容されたが、生き延びてイスラエルに移住した。この作品は『走れ、走って逃げろ』(岩波少年文庫、2015 年）という題名で邦訳が刊行されている（訳者の母袋夏生さんの『ヘブライ文学散歩』(未知谷、2020 年）にはホロコーストの子どもたちに関わる本がたくさん紹介されている)。原作はヘブライ語で書かれ、2001 年に刊行された。エスペラント訳はポーランドとイスラエルのエスペランティストによる共同作業。

また、ドイツの映画監督のペペ・ダンカートにより映画化もされ、日本では『ふたつの名前を持つ少年』というタイトルで 2015 年に公開されている。DVD やデジタル配信で入手可能なので、作品を読んだあとで見ると理解が深まるだろう。

版元はポーランドのルブリンにある Ars Libri となっているが、詳細はわからない。UEA のカタログを見ると、ここからは 21 点の本が刊行されている。ユリオ・バギーの作品が７点あるほか、翻訳、原作文学など多彩である。私は４冊しか持っていないが、いずれもハードカバーで瀟洒な装丁の立派な本で、出版活動の盛況ぶりがうかがわれる。本書 “Kuru,knabo,kuru” は、邦訳があるとはいえ、エスペラント訳がなければ出会うことは恐らくなかったであろう。訳者たちや出版社が感動的な読書体験を与えてくれたことに感謝したい。

（La Movado2021 年６月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた）